



仏壇・仏具 あみだ堂
代表取締役社長 能呂慎太郎さん

—えっ！仏具店が子育て支援？

「自分は特別なことをやっているという感覚はありませんが、どうして仏具店が子育て支援を？と不思議に思われることはありますね。」そう話すのは、あみだ堂代表取締役社長の能呂慎太郎さん。従業員9名を抱える仏具店の2代目です。

北海道自動車短期大学(現北海道科学大学短期大学部)卒業後、自動車販売の仕事をしていた能呂さん。ある日、先代の社長である父、修一さんと話をしている時、いつの間にか仏具店を引き継ぐ気持ちが湧いてきたといいます。「特にドラマチックなきっかけがあったわけではなく、本当に自然な流れでそうになりました。」と明るく笑います。

「仏具店の仕事は、お寺との付き合いが多くなります。宗教法人と教育のつながりは実は深く、幼稚園や学校を経営しているところも少なくありません。ある宗教法人が経営する幼稚園を訪れた際に、ひな人形のセットが複数置かれているのを見かけました。不思議に思って聞いてみると、地域の方から次々と寄贈されたとのこと。ひな人形のない幼稚園もあるのに、もったいない。」善意とニーズをうまくつなげられないか考えた能呂さんが、社内で立ち上げたのが子どもチャリティー事業部でした。

—大人が子どものことを考えるのは自然なこと

子どもチャリティー事業部の役割は、寄付のコーディネートです。教育機関や子どもを支援する団体などに必要なものがないか聞き取る一方、それを寄付してくれる人を探し、両者をつなげます。

人に寄り添い 地域とともに歩む ～企業の社会貢献の形～

少子高齢化が進み、地域においても活動の担い手に対する支援の輪の中で、企業が果たす役割はますます厚別区内でも多くの企業がさまざまな社会貢献にた暮らしを守っています。

「学校などに飛び込みで話を聞きに行くのですが、初めはどこに行っても不審に思われました。」と能呂さんは苦笑いしながら振り返ります。それでも諦めることがなかったのは、「この取組が、子どもたちの福祉の向上と健全な成長に必ずつながる。」という揺るぎない信念があったからです。何度も足を運び、丁寧に説明をし続けることで、少しずつ協力してくれる人や企業が増えてきました。

「大人が子どものことを考えるのは自然なことだと思います。」そういう能呂さんも3人の子どもを育てる父親です。親として、一人の大人として、子どもの健全育成という願いをこの事業に託します。

—できることを本気で

「仏具店の仕事をしていると、人生について考えることが多くなります。子どもチャリティー事業部のテーマは『いのちのリレー』。亡くなった方のために使われるものを扱う私たちが、子どもたちの未来のために汗を流すことで、人の人生を巡らせていくという意味です。」

2019年から始めた善意とニーズのコーディネートはすでに50件を超え、地域にも少しずつ浸透してきました。最近では、これまで積み重ねてきたノウハウとネットワークを活かして、コロナ禍で困窮する大学生への食糧支援、ひとり親家庭などの支援を行うフードバンクとのコラボレーションといった新たな展開も生まれています。

「自分たちはすべての人を支援することはできないし、すべてのエリアをカバーすることもできません。それでも同じ思いを持つ仲間が各地に生まれ、その取組が広がっていくことで、もっと多くの子どもたちに笑顔が届けられます。」熱い想いを込めて語る能呂さんのまなざしは、さらなる未来を見据えているようです。

仏壇・仏具 あみだ堂(本店) 電話: 375-9516
住所: 札幌市厚別区厚別東2条2丁目3-10



厚別原始林通郵便局
局長 末廣紀久代さん

「郵便局は千客万来。さまざまな困り事を抱えた方も来局します。私たちは地域の一員として、少しでもお役に立ちたい。」末廣さんは真っ直ぐな地域への想いを語ります。

—困っている人になったつもりで

「困っている方がいたら、何とかしてあげたい。局員にも『相手の気持ちを察して、その方とその方のご家族になったつもりで対応してほしい。』と伝えています。」現在局員は5名。できることには当然限りがあります。それでも、親身な対応を徹底することを末廣さんは大切にしています。

このような考え方の原点には、末廣さんが小学生のときに病気が原因で障がい者になったお母さんのことがあるといいます。お母さんとその周りを取り巻く人達との関わりを見ることで、人を思いやる気持ちは育まれてきました。

「以前年金事務所に相談に行った時、職員の方が本当に親切丁寧に対応してくださったことが忘れられません。」そうした経験を持つ末廣さんの言葉だからこそ、局員に一人ひとりに寄り添うことの大切さが伝わっていきます。

「今は、郵便局として障がい者支援に貢献できることがないか考えています。」まだまだ構想段階ですが、実現すれば先駆的な取組となります。

人を大切に想う末廣さんのやさしいまなざしの奥には、自分の立場でできることに積極的に挑戦していく前向きで強い信念が感じられました。

厚別原始林通郵便局 電話: 898-2232
住所: 札幌市厚別区厚別東3条3丁目1-30

不足が課題となっている昨今、困り事を抱える方ますます大きくなっています。取り組んでおり、地域の一員として住民の安心し

—身近だった郵便局

「子どもの頃から手紙を書くことが大好きでした。近所の郵便局にはよく切手を買いに行っていましたね。」厚別原始林通郵便局局長の末廣紀久代さんは、学生時代を過ごした故郷函館の思い出を振り返ります。身近な存在だった郵便局を就職先に選んだ末廣さん。夫の転勤で札幌に移り住んだ後も郵便局の仕事を受け、14年前に局長として今の職場に着任しました。

厚別原始林通郵便局は以前から地域とのつながりが強く、町内会に法人として加入し、小学生の書道作品の展示などでも協力していました。

「12年前になりますが、最初は、近所に水彩画を描く方がいるという情報をいただき、『ぜひ展示してみませんか。』と誘いかけしてみたことがきっかけでした。」という末廣さん。「その後もご紹介により、少しずつ展示いただけるお客さまが増え、地域との交流が深まってきました。」展示会は、今では一年先まで予約が埋まるほどの人気です。

—地域の一員として

日本郵便株式会社は、2017年から札幌市と「見守りに関する協定」を締結しています。この協定は、民間事業者の協力により、高齢者などへの重層的な見守り体制の充実を図るものです。

厚別原始林通郵便局では、独自に認知症に関する内部研修を行ってスタッフの意識を高めるなど、少しでも地域の課題解決に貢献することを目指しています。

「3年程前、ほぼ毎日顔を出してくれる常連のお客さまが1週間来訪せず、心配になってお宅まで様子を見に行きました。人の気配はなく、新聞受けには郵便物がたまっている状態。いよいよ不安になり、事前に聞いていたご家族に連絡をして、入院中であることがわかったときは、心かほっとしました。」と末廣さんは回想します。